

戦国大名が 愛した幸若舞

（越前生まれの日本を代表する芸能）



織 田信長や豊臣秀吉が愛したとされる伝統芸能、幸若舞。室町時代に桃井直詮（幼名 幸若丸）

によって興され、その一族が現在の越前町西田中周辺に住居を構え活動したことから、越前町が発祥の地とされています。数々の武将たちに愛された幸若舞の歴史はどういったものだったのでしょうか。

戦国時代の英傑・織田信長が幸若舞を愛好していたことは有名ですが、幸若舞の演目のうち、特に『敦盛』を好みました。永禄3（1560）年5月19日、今川義元との桶狭間の戦いに向かう信長は、『敦盛』を自ら舞った後に出陣したと伝えられているほどです。『信長公記』には、

当時の様子が次のように描写されています。「信長は『敦盛』の舞を舞った。『人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。ひとたび生を得て、滅せぬ者のあるべきか』と歌い舞って、『ホラ貝を吹け、武器をよこせ』と言い、甲を着け、立つたまま食事をとり、兜をかぶって出陣した。」（中川太古訳『現代語訳 信長公記（新人物文庫）』中経出版）



豊臣秀吉朱印状（領知行状）
（越前町教育委員会所蔵）

信長が幸若家を庇護したことを伝える史料が残されています。信長が朝倉氏を滅ぼした5か月後にあたる天正2（1574）年1月6日に発給された文書には、幸若八郎九郎へ100石の領地を与える旨が示されています。この文書は幸若家の知行地についての最古の記録で、越前に幸若家の領地が誕生した瞬間といえます。

幸若家の領地支配を認めたのは、織田信長だけではありません。天正9（1581）年6月2日の「柴田勝家判物」、天正11（1583）年8月21日の「丹羽長秀判物」、天正12（1584）年8月8日の「丹羽長秀判物」、天正13（1585）年6月11日の「丹羽長重判物写」など、その後越前を支配した大名たちが発給した文書にも同様の記録がみえます。特に慶長3（1598）年7月28日の「豊臣秀吉朱印状」には「越前国朝日村のうち224石8斗3升・「けい（気比）庄（の）うち120石1斗7升」とあり、越前町朝日区と気比庄区にまたがって幸若家が領地を保有していたことがわかります。

江戸時代に入ると、幸若弥次郎家・八郎九郎家・小八郎家が西田中・朝

日村、伊右衛門家が天王・宝泉寺村、五郎右衛門家が敦賀田島村を中心に合計1,175石の知行地を与えられ、幸若家はますます繁栄しています。同じ頃、幸若舞は幕府の式楽となり、日本を代表する芸能となっていくのです。

関連史料・ゆかりの地

「幸若音曲発祥の地碑」と
越前町幸若文化情報センター
（越前町立図書館）



幸若音曲発祥の地碑



越前町幸若文化情報センター

「幸若音曲発祥の地碑」が建つ地は、かつて幸若3家のひとつ幸若八郎九郎家の屋敷地でした。越前町幸若文化情報センターは幸若展示室・幸若研究室・幸若資料室を備え、幸若舞に関する調査・研究の拠点として整備されています。

【住所】

〈幸若音曲発祥の地碑〉 丹生郡越前町西田中8-20-22 越前町社会福祉センター敷地内
（JR 福井駅より福鉄バス福浦線で50分「越前町役場前」下車徒歩5分）
〈越前町幸若文化情報センター〉 丹生郡越前町西田中2-210
（JR 福井駅より福鉄バス福浦線で45分「図書館前」下車徒歩1分）

参考資料等

朝日町誌編集委員会編『朝日町誌』資料編1 朝日町役場、越前町教育委員会編『越前幸若舞を知る100項』
中川太古訳『現代語訳 信長公記（新人物文庫）』中経出版

執筆・協力

越前町織田文化歴史館 学芸員 村上 雅紀